

Market Flash

発表日: 2019年2月5日(火)

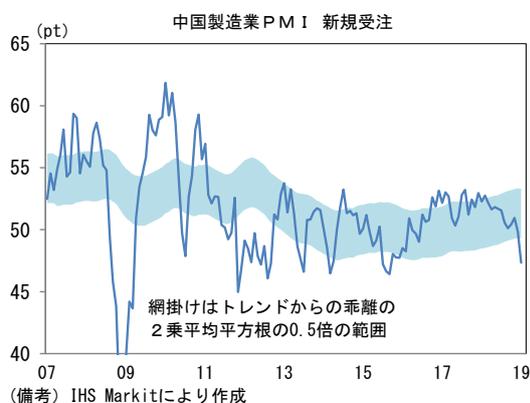
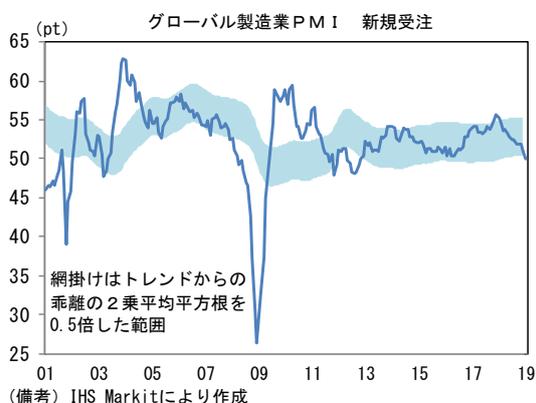
米: どこ吹く風 日欧中: 正念場
 ~ 良くも悪くも独り勝ち ~

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
 主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL: 03-5221-4521)

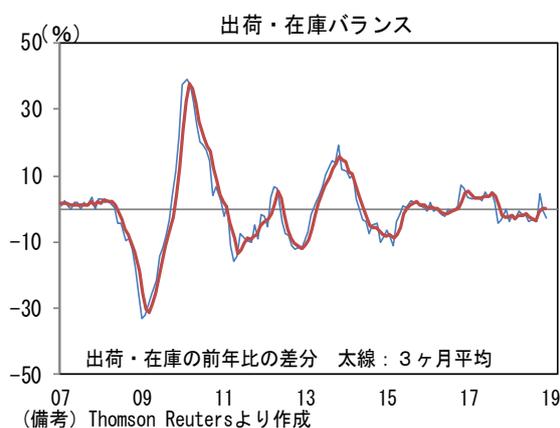
- ・日経平均は底堅い企業業績を背景に、先行き12ヶ月は23000近傍で推移しよう。
- ・USD/JPYは米利上げ打ち止めが視野に入中、先行き12ヶ月で105へと下落しよう。
- ・日銀は現在のYCCを2020年春頃まで維持するだろう。
- ・FEDは2019年後半に利上げを停止する可能性があるだろう。

< # PMI # 新規受注 # 正念場 # 在庫率 >

- ・年末年始の株価急落には肝を冷やしたが、NYダウが12月の下落の大半を埋め、日経平均も底値から2000円以上戻すなど、金融市場は落ち着きを取り戻しつつある。米国では、FEDがハト派に傾斜する下、強い雇用統計が投資家心理改善に貢献。そうした下、日本では秋口頃までの自然災害で落ち込んだハードデータ（生産、輸出、消費）がリバウンド局面にあり安心感を醸成している。
- ・しかしながら米国以外の国々では、速報性に優れたソフトデータが更なる悪化を示しており、非常に不気味。日本、ユーロ圏、中国のPMIは明確な下向きトレンドから抜け出せず、グローバル製造業PMI新規受注の下方モメンタムは2015-16年より状況が悪い。日銀が注視している尺度（2乗平均平方根からの乖離）でみると、目下の状況が底割れ寸前の正念場であることがわかる。これら指標が更に悪化すれば、金融市場の空気は“米経済良ければ全て良し”とはならず、再び強いリスクオフに見舞われる可能性がある。特に本邦金融市場では中国と関連の深い資本財セクター等で悪化方向へのストーリーが描きやすく注意が必要。



- ・他方、PMIなどソフトデータで下げ止まりが確認できれば、安心感が広がり易いとみる。日本の生産統計に目を向けると、在庫率が低下基調にあり、出荷・在庫バランス（前年比差分）も大きく下に突き出ている訳でもない。適切な在庫管理の下で企業は余分な在庫を抱えておらず、生産調整の必要性に乏しい。したがって新たな需要に対して生産が増加し易く、その期待も広がる可能性があるだろう。



【国内株式市場・アジアオセアニア経済指標】

- ・日本株は米国株上昇に追随して高寄り後、もみ合い（9：30）。

【その他海外経済指標他】

- ・欧米で重要な経済指標の公表はなかった。

【海外株式市場・外国為替相場・債券市場他】

- ・前日の米国株は上昇。マクロ面で新規の材料に乏しい中、好調な企業決算を好感。WT I 原油は 54.56^{ドル}（▲0.70^{ドル}）。
- ・前日のG10通貨はUSD全面高。米長期金利が上昇する下、幅広い通貨に対してUSD買いが優勢。ただし、最弱のSEKに対しても0.5%の上昇と変化率は小幅。USD/JPYは110近傍へと上昇。
- ・前日の米10年金利は2.724%（+3.9bp）で引け。新規の材料に乏しい中、米国株上昇を横目に金利上昇。カーブ上では利下げ観測の後退から2年（2.536%、+3.5bp）の上昇が続いた。欧州債市場（10年）はドイツ（0.175%、+1.1bp）、フランス、スペイン、イタリアが何れも小幅な変動。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。